

山と博物館

第52巻 第6号 2007年6月25日

市立大町山岳博物館

企画展特集号 「よみがえる高嶺の草花 —志村烏嶺 旧蔵植物標本—」
近代日本登山の先駆者が遺した山の宝物

会期：平成19年7月7日～9月24日（※7月9日・8月27日・9月3・10・18日は休館）



白馬山御花畑(独立行政法人 国立科学博物館 蔵)

開催にあたって

市立大町山岳博物館

志村烏嶺（しむら・うれい）本名・寛（ひろし）は、明治7（1874）年、栃木県那須郡烏山町（現 那須烏山市）に生まれました。「烏嶺」はこの地にちなむ号です。

栃木県尋常師範学校卒業後、栃木県の小中学校、師範学校で教員を勤め、明治36（1903）年に長野中学校へ博物科教師として赴任。翌37年8月、白馬岳と出会います。長野市を徒歩で出発。柳澤峠に立つて初めて白馬連峰を目の当たりにし、「代赭色（たいしゃいろ）の断崖、谷を埋めた残雪、夕陽に輝く峰頭、実に莊嚴を極めた勇姿に、突如頰脣（ほおげた）をおげたをガーンと殴られたような気がした。那須、日光、浅間、八ヶ岳等かつて登山した山々とは全く桁違いの代物であった」（※1）、と述べています。いよいよ白馬の核心部、葱平（ねぶかつびら）に至っては、「絢爛艷麗（けんらんえんれい）なるいわゆる御花畑の光景、その美その麗、何物かよく比すべきものぞ。この天の樂園に逍遙（しょうよう）する吾は、心すでに神、身はこれ仙」（※2）と心打たれ、高山植物研究の道を踏み出します。写真術の心得があつた烏嶺は、この山行でもシャッターを切り、わが国最初期の山岳写真家の道も歩み始めます。明治後期から大正初期、近代日本登山の黎明期（れいめいき）にあつて、高山植物研究と写真撮影を二大目的とする山行を重ねることに、烏嶺は登山家としても名を馳せてゆくことになりました。

山岳博物館には、烏嶺が採集した数多くの高山植物標本や、文書資料が残されています。

本展では高山植物標本を主役に、植物研究者としての烏嶺を紹介し、山岳写真家、登山家としての烏嶺の位置を確かめます。

ご覧のほど、お願いいたします。

※1「日本山岳会創立前後之見聞」（日本山岳会「山岳」第50年号）より

※2「白馬岳第一回登山記」（前田曙山共著「やま」）より

企画展「よみがえる高嶺の草花」

—志村烏嶺 旧蔵植物標本—

近代日本登山の先駆者が遺した山の宝物（前編）

市立大町山岳博物館

白馬岳との出会い

明治37（1904）年8月19日、烏嶺は勤務先である県立長野中学の職員清水市太郎を伴い長野市を徒歩で出発する（※1）。

そして柳澤峠（現 長野市鬼無里と白馬村の境、当時の主要道上）に立ち、白馬連峰の雄大なスケールに驚嘆した。理科大学矢部吉楨が著した「白馬植物目録」（日本植物学会の植物雑誌に掲載）で、植物が豊富なことは知っていたので、つい3日ほど前に八ヶ岳に登り、赤岳から白馬連峰を遠望し、「矢も盾もたまず」実行してしまったこの白馬行の最初の衝撃だった（※1、2）。

正確な地図もガイドも存在しない当時のこと、官有林見廻りをしていて北城村細野（現白馬村八方）の丸山常吉に案内を頼んだ。常吉は「老体の故を以て」、息子広太郎と丸山吉十が同行することとなった（※1）。

20日午後4時、葱平に至った烏嶺は、お花畑と雪渓と山々が織りなす山岳風景に魅了され、夢中で植物を採集し、写真を撮った（※1）。

この八ヶ岳に続く白馬との出会いが、烏嶺のその後の人生を決定づける。

晩年、烏嶺は「小島（鳥水）氏が近代登山の黎明は槍ヶ岳というなら、私は近代登山の黎明は白馬からというたい」（※3）と述べている。

著書、雑誌、新聞等でその魅力を自ら普及啓発し、撮影した写真が日本登山界のみならず、ウォルター・ウェストンを介して白馬山系としては初めて国外に紹介されたという自負からの言であるが、「日本近代登山」の定義はともかくとしても、この言にはある種の的を獲たところがある。

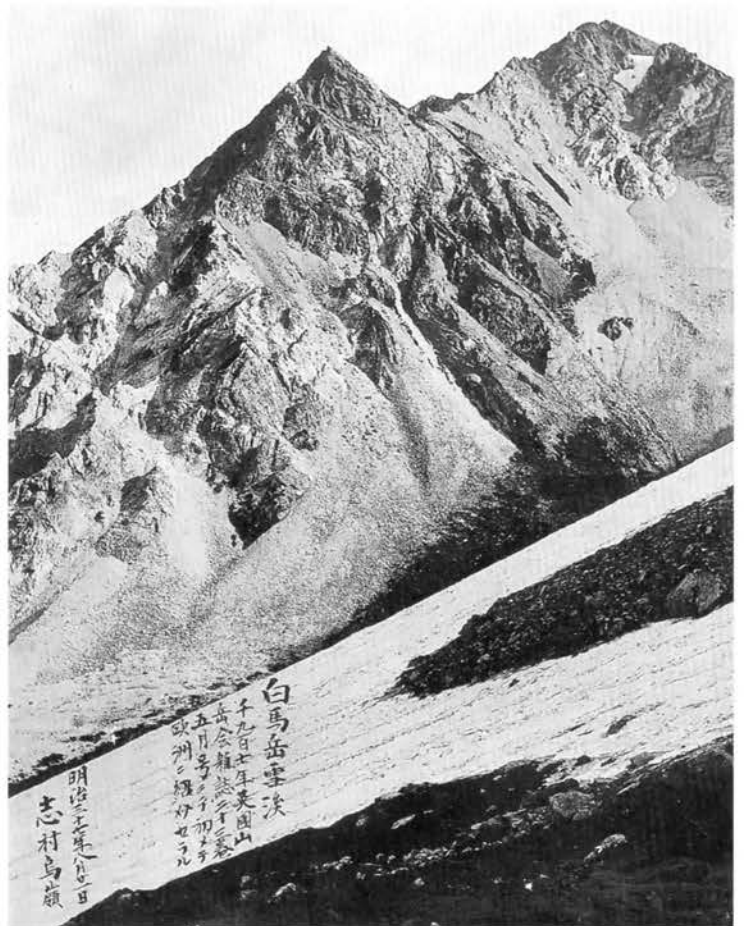
明治16（1883）年には窪田畔夫（北安曇郡長）や渡辺敏（仁科学校訓導）らが、早くも科学的な観点をもって大雪渓から登山し、22年には地質学者の大塚専一らが縦走、28年には小杉復堂らが小川温泉からこの山群へ探検的な登山を行なっている（※4）。

また、長野時代の烏嶺の先輩格、植物学者にして、後々矢沢米三郎とともに長野県理科教育の中核となる河野齡蔵は31年に初めて白馬に登り、以降烏嶺同様に高山植物研究、野外教育や登山行為普及の格好のフィールドとしている（※5）からである。

そして信仰の山を除き、北アルプスの山々の中で最も早く多くの趣味的登山者が目指し、山小屋も整備されてゆく山の代表が白馬岳であった。山そのものの魅力やアプローチの利便性とともに、烏嶺らパイオニアの普及啓発活動の力が大きかったと考えられる。

（※1）志村寛（1957）「日本山岳会創立前後之見聞」、『山岳』第50年号

（※2）志村烏嶺（1955）「高山植物の宝庫 信濃の山々」、『信濃毎日新聞』1月15日付記事



白馬岳雪渓（志村烏嶺撮影）

（※3）志村烏嶺（1958）「近代登山草わきのころ」、『山と博物館』第3巻第5号
（※4）山と溪谷社（2005）『日本登山史年表』
（※5）長沢武（2001）『河野齡蔵と信州理科教育』、『新・北アルプス博物誌』

植物研究者としての烏嶺

烏嶺は生涯で4000種もの植物標本作製したと言われ（※1）、その標本は本人や長男の濟美（さいび）氏により、植物友の会（現社団法人 日本植物友の会）をはじめ、国立科学博物館（TSN）や牧野標本館（MAK）、栃木県の佐野高校資料室、そしてここ市立大町山岳博物館に収められた。

烏嶺が活躍した明治後期から大正初期の時代は植物探索が盛んで、矢田部良吉や松村任

三、牧野富太郎などが研究のために長野県を訪れ、数々の成果品をあげていた。また、県内在住研究者では、明治30（1897）年8月から大町小学校の校長も歴任した教育者、河野齡蔵（1865—1939）が『高山植物』や『高山植物の研究』、『日本高山植物図説』、『高山植物の培養』などを著し、白馬岳でウルップソウ、シロウマアサツキ、カライトソウ、オオサクラソウの県内最初の採品をあげ、また長野尋常師範学校などの教師を勤め、明治35（1902）年に信濃博物館を創設した矢沢米三郎（1868—1942）は、『中等新植物教科書』や『植物実験学』、『帝国植物提綱』、『日本高山植物名彙』などを著し、白馬岳でクモマミミナグ

志村烏嶺 略年譜

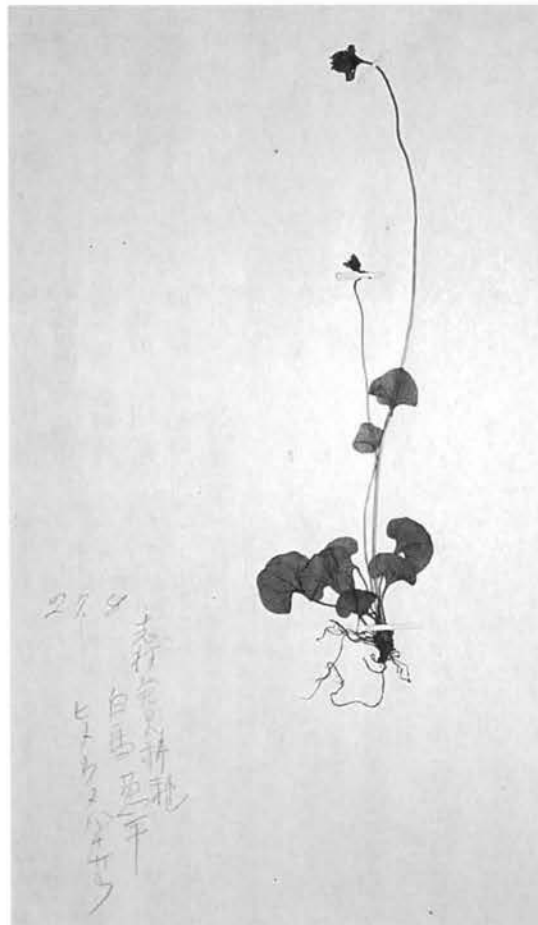
西暦	和暦	月日	年齢	内 容	出 典
1874	明治7	2/5		栃木県那須郡烏山町に、父・真澄、母・ユウの長男として生まれる	*1
1896	明治29	3/28	22	栃木県尋常師範学校卒業 小学校本科正教員免許状が下附され、以降、栃木県内の小学校訓導として勤務	*1
1902	明治35			この頃、水戸市内の営業写真家草野金松らから写真術を習得する	*2
1903	明治36	11/24		長野県長野中学校に教諭として赴任 ドイツ帰りの植物学者、三好学に触発されて「植物の垂直水平分布」の研究を志す	*1 *2
1904	明治37	4~		雪融けとともに、休日ごとに飯綱山、戸隠山などに植物採集行を重ねる 夏期休暇までに約70品種を培養	*1
		8		浅間山に続き、旅程を変更して八ヶ岳登山 横岳にて高山植物研究に専念する決心をする	*4
		8		初の白馬岳登山 後に新種とされるヒメウメバチソウ、シロウマオウギを採集・写真撮影 以降、大正4年まで毎年白馬に登る	*5
1905	明治38	10		10月下旬、山岳会(後の日本山岳会)の発起人となる城数馬と高頭式を長野市内で引き合わせ、鼎談する	*7
		10		山岳会(後の日本山岳会)発足、入会 会員番号18番	*1
		11		長野市内の写真展覧会で、善光寺の裏で撮影し全紙二倍に伸ばした「朝ぎり」が投票で一等となる	*1
1906	明治39	4/5	32	山岳会機関誌『山岳』第一年一号発刊	*1
		8		高頭式らと「アルプス三大横断」登山(白馬岳、針ノ木越え、燕岳~槍ヶ岳縦走)	*5
1907	明治40	7/15	33	前田曙山との共著『やま』出版	
1908	明治41	5/17	34	地学協会で行なわれた第1回山岳大会において、幻灯(スライド)をまじえ「日本アルプス雑感」と題し講演	*7
1909	明治42	3/10	35	『高山植物採集及培養法』出版	
		6		『山岳美観』第一輯出版	*1
1912	明治45	8	38	木曾御岳、加賀白山登山	*1
1913	大正2	9/10	39	『千山萬岳』出版	
1922	大正11	5	48	6年間の台湾滞在から帰国 26年余の教師生活を終え、東京の目黒にて植物園「素香園」を経営する	*1
1941	昭和16		67	谷川岳登山。ミヤマウスユキソウを採集する	*1
1954	昭和29	12		植物標本4000種を東大「植物友の会」に寄贈、との報道	*3 *4
1955	昭和30	11/26	81	日本山岳会創立50周年記念晩餐会において、秩父宮妃殿下の御前で「白馬五十年」のスピーチ	*1
1956	昭和31	8	82	13回目の白馬岳登山 登頂に成功	*6
1961	昭和36	3/7	87	逝去	*1

※年齢は満年齢

※敬称略

- 出 典 *1 中山琰一 (1989)『山岳宗徒烏嶺小伝』
 *2 中山琰一 (1993)『烏嶺研究年表 栃木時代の志村烏嶺』(栃木県歴史文化研究会編『歴史と文化』第2号)
 *3 東京新聞 1954.12.25付
 *4 信濃毎日新聞 1955.1.15付

- *5 志村烏嶺・前田曙山 (1907)『やま』
 *6 志村烏嶺 (1957)『白馬五十年』(『岳人』110号)
 *7 志村烏嶺 (1957)『日本山岳会創立前後之見聞』(日本山岳会『山岳』第50年号)
 *8 志村烏嶺 (1913)『千山萬岳』



ヒメウメバチソウ

サ、ミヤマハナワラビ、クモマキンポウゲ、ムカゴユキノシタなどの県内最初の採品をあげ、「信濃博物学雑誌」に研究の数々を発表している(※2)。

烏嶺の研究もまた、その雑誌に見ることが出来る(※3、4)。

烏嶺の植物への関心は、生い立ちとその環境にあったようである。幼少の頃は病弱で、近所の子ともたちと嬉遊することを好まず、独り鬱蒼とした城山の山中に入っては草花に親しんだと言う。またランなどの栽培に熱中したのは、祖父の趣味による影響が大きかったようである(※5)。

明治36年11月、長野中学に赴任。翌春、雪融けとともに休日となれば戸隠山や飯綱山に登り、高山植物の生品を暑中休暇までに70種ほど集め培養を始めた(※6)。こうした高山植物研究の契機は、ドイツ留学の後、東京大学教授に就任した三好学の「植物の垂直分布」に関する当時の見聞による(※7、8)。

任地の先々で好適な題材を選んでは研究を重ねてきた烏嶺にとって、長野は高山植物研究の絶好のフィールドとなったのである。

明治37(1904)年8月、烏嶺は浅間山に登る。植物の少なさに失望したもの、頂上から見た八ヶ岳の雄姿に心ひかれ、旅程を変更して八ヶ岳に登ってしまふ。硫黄岳、横岳、赤岳までくまなく、ムシトリスミレの群落やチョウノスケソウ、ウルップソウ、アラシゲサ、ハクサンイチゲ、ツクモゲサ、コマクサ、ツガザクラ、イワウメ、チシマギキョウなどの生活状態を観察し、採集した(※1)。

烏嶺は晩年、「目をとじて思いやる私のまぶたに、ありありと浮び出るのは、あのときに見た花々の姿です。そしてそれらがいつせいに咲きにおう、お花畑の壮観を初めて目にしたときの心のふるえが、私をこの世ならぬ別の世界にいざないます。五十年の歳月をもつても、色あせることのない感動を与えた高山の宝石―高山植物に、この八ヶ岳登



シロウマオウギ



著書「千山萬岳」・「高山植物採集及培養法」・「やま」

山で私はとりつかれたのでした。」と語っている(※9)。

八ヶ岳で鳥嶺は高山植物の研究に専念する決意をし、赤岳から遠く眺めた白馬連峰へと即刻、歩も心も向かうのであった。

明治37年8月の初めての白馬登山では、矢田部により産地秘匿とされていたトガクシシヨウマを絶崖に見つけて数株を採取したのをはじめ、この登山で採集した植物は180種にもものぼる。当時鳥嶺は自らでも植物の同定を行っていたであろうが、山岳博物館に寄贈された標本の台紙には、「牧野検定」の走り書きがある。牧野とは、当時東京大学助手であった牧野富太郎(1862-1957)のことである。鳥嶺は各地で植物を採集しては牧野の元へさく葉標本を送り、同定を依頼していたようである。最初

の白馬登山でシロウマオウギ(マメ科)やヒメウメバチソウ(ユキノシタ科)が新種であることを見出したのも牧野によるものであった(※10、※12)。その時のシロウマオウギ(MAK130570)のさく葉標本(Syntype)は、現在、首都東京大学構内にある牧野標本館に収められ、一緒に採集されたと思われるシロウマオウギやヒメウメバチソウの標本は山岳博物館にも寄贈されている。

また国立科学博物館には、鳥嶺が採集した少なくとも300点以上の標本が収蔵されていると思われる、最初の白馬登山で採集したハゴモグサ(TSN124148)やチョウノスケソウ(TSN124149)、ツクモグサ(TSN124153)を鳥嶺は、第20回腊葉展に出展、寄贈している。

その後、大正6(1916)年4月に台湾へ渡るまでの長野時代およそ13年間に、毎年の白馬岳のほか御岳、木曾駒ヶ岳、乗鞍岳、槍ヶ岳、常念岳、大天井岳、燕岳、立山、尾瀬燧岳、飯豊山、磐梯山、那須岳、日光山、白根山、早池峰山、鳥海山、岩木山、恐山などに登り、植物採集と研究に精力を注いだ。最後の植物採集は昭和16(1941)年、67歳の時。谷川岳のミヤマウスユキソウであった(※8)。

「私の歩んできた道をふりかえってみて、山の霊気と花の香気に包まれた人生をありがたいことだと思えます。(中略)今はたゞ、「山を愛し、高山植物を愛してくれ」と人々にうつたえる気持ちでいっぱいです。」(※9 81歳時)

(※1) 東京新聞社(1954)「六十年來の収集あけて学会へ」、「東京新聞」12月25日付記事

(※2) 丸山利雄(1997)「明治時代の主な日本人研究者」、「長野県植物誌」

(※3) 志村寛(1905)「ヒメウメバチサウ Parnassia alpicor Makino に就き」、「信濃博物学雑誌」

(※4) 志村鳥嶺(1912)「二三の高山植物に就きて」、「信濃博物学雑誌」

(※5) 伊藤肇(1958)「志村鳥嶺翁(下)」、「日本山岳会報」1958-1959

(※6) 志村寛(1957)「日本山岳会創立前後之見聞」、「山岳」第50年号

(※7) 志村鳥嶺ほか口述(1957)「山岳写真創生記」、「岳人」108号

(※8) 中山琥一(1989)「山岳宗徒鳥嶺小伝」

(※9) 志村寛(1955)「高山植物とともに六十年」、「中学時代」4月号

(※10) Makino, T. (1906)「Observations on the Flora of Japan」[Botanical Magazine Tokyo]20

(※11) 信濃毎日新聞社(1955)「高山植物の宝庫 信州の山々」[信濃毎日新聞社]1月15日付記事

(※12) Makino, T. (1904)「Observations on the Flora of Japan」[Botanical Magazine Tokyo]18

(つづく)

(市立大町山岳博物館学芸員 岑村 隆

千葉 悟志)

山と博物館 第52巻 第6号

発行 二〇〇七年六月二十五日発行

〒388-0002 長野県大町市大町八〇五六一一

市立大町山岳博物館

TEL 〇二六一一一三〇一一

FAX 〇二六一一一三〇一一

E-mail sanpaku@city.omachi.nagano.jp

URL http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/

印刷 株 奥村印刷

定価 年額 一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)

郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七一三三三三